

沖縄県における小学校国語科の実践状況と 授業改善の推進要因の解明

— 4年間の研究の整理 —

水戸部 修治
(教育学科教授)

躍進著しい沖縄県の小学校国語科の授業改善の推進要因を解明すべく、2017年から行っている調査研究について、現時点までの取組とそこから明らかになったことを総括する。授業改善に協同的に関わるアクションリサーチにより、目指す国語科の資質・能力にふさわしい言語活動を精緻に位置付けようとする授業構想が浸透しており、充実した授業展開が広がっているとの認識を得た。

キーワード：授業改善，小学校国語科，沖縄県，言語活動，学習指導要領

1. 研究の目的

近年、沖縄県の小学校国語科の学力調査結果が大きく向上している。本研究全体の目的は、その主な要因に県教育委員会と学校が連携した国語科授業改善が挙げられるという仮説の下、教育委員会の取組と学校の授業改善に関する実態把握及びその分析によって、これを検証しようとするものである。

筆者は、2017年から現在まで、京都女子大学研究経費助成を受け、この研究を進めてきた。研究初年次の前半の調査で明らかになったことについては研究論文「沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明に関する基礎的考察」(注1)において検討を試みたところである。また2017年度から2019年度にかけて実施した調査の内容については、各年度その概況や実施状況を報告書として取りまとめた。(注2)

本論考においては、これまでの研究を通して明らかになった授業改善の実施状況及びその推進要因を明らかにすることを目的とし、経年調査結果の分析を基に、上記論文及び報告書の内容に2020年度の調査経過を踏まえて大幅に加筆し、考察を行うものである。

2. 近年の沖縄県の小学校国語科の状況

全国学力・学習状況調査(文部科学省)について沖縄県の小学校国語科の結果を見ると、2007年の調査開始以来2013年までは、正答率が全国平均を9.0~3.7ポイント下回っていたが、2014年はいずれも全国平均との差は-1ポイント以下となり、2015年はB問題については初めて全国平均を1.9ポイント上回った。(注3) 2016~2018年についても、B問題は全国平均を維持している。2019年度の調査結果では、全国平均を4ポイント上回りその改善の成果がより確かなものとなっている。(注4) これらの結果から、全国学力・学習状況調査の小学校国語科においては、全国平均を基に考えると、その結果が大きく向上していると言えるだろう。

3. 調査の基本方針

4年間の中で、調査の具体的方法は少しずつ修正しているものの、沖縄県における小学校国語科の授業の実際の姿を可能な限り直接に把握、分析することを重視してきた。それは、本研究の目的が、前項のような学力向上の要因に、国語科の授業改善があると考え、どのような授業改善が図られているか、そして授業改善の推進要因は何かを明らかにしようとするものだから

である。

4. これまでの調査の経過

前項の方針の下、2017年以降、次のように調査を進めてきた。

(1) 沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明（2017年）

沖縄県教育委員会、教育事務所（2機関）及び小学校（6校）での聞き取り調査及び授業観察により、沖縄県全域で県教育委員会によるきめ細かな指導訪問体制を構築していること、各教員の日常的な授業改善の取組が進められていることが分かった。（注5）

(2) アクションリサーチによる沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明（2018年）

調査手法を、より積極的に授業構想に参加する方式に変更。対象校7校。事前の授業構想段階から、授業者を中心とする学校全体での組織的、日常的な取組が進められていることが分かった。

(3) 沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因解明と更なる推進に向けたアクションリサーチ（2019年）

調査対象校を8校に拡充。うち3校については複数回の調査訪問を実施し、年度内の授業改善の推進状況を明らかにした。

(4) 沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因解明と更なる推進に向けた授業構想システムの構築（2020年）

対象校5校。沖縄県での取組をより広域の国語科授業改善にも適用できるように、授業構想のシステム化を目指していく。

5. アクションリサーチの具体的進め方

前項に述べた通り、2018年以降は授業構想段階から筆者自身が積極的に授業改善関わるアクションリサーチを行ってきた。この手法は、外部から客観的に分析するだけでは把握しきれない、授業者の思いや授業改善に向けて模索する姿、よりよい授業を目指す熱意などをより詳細に明らかにすることができることが利点である。

2018年度調査以降は、調査対象となる小学校と、授業研究会の際の訪問のみならず、事前の段階から筆者が授業構想に参加する形式をとってきた。2020年度は、新型コロナウイルス感染防止等への配慮を含め、Zoom等を活用した形に変更している。具体的な手続きとしては、次のような文書を作成（注6）し、調査対象校（以下「研究指定校」）との共通理解を図りながら進めた。

授業構想の打ち合わせ及び授業研究会について（2020年版）

1 事前の取組について

(1) 基本的な進め方

本研究では、①「授業研究に先立っての、構想段階での相談」と、②「当日の授業」、③「授業者、学校の先生方及び研究代表者（水戸部）等による事後の協議」を行うことを基本といたします。ただし①、②、③の具体的内容については、各研究指定校のご希望により進めることといたします。

(2) 新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保障」を踏まえた研究推進

文部科学省「新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の『学びの保障』総合対策パッケージ」（令和2年6月）の趣旨を踏まえ、研究のための研究ではなく、日常的な授業改善や、新型コロナウイルス感染症対策の状況を踏まえた国語科の学習の質保障等を主眼とした研究を進めることとします。

2 具体的な進め方

(1) 授業研究に先立っての、構想段階での相談
学校研究をより効果的に推進するため、また授業者の授業改善への取組を支援するため、事前の授業相談をぜひお願いします。

○学習指導案の完成前の段階で、授業構想をメール等でご相談ください。

○Zoomを活用した双方向の指導案検討もお受けできます。

○授業構想は、メモ書きや書きかけの学習指導案でも構いません。何らかの書式があった方がよい場合は、別添の書式1～3（3は記入

例)をご活用いただいても構いません。

- 国語科が単元のまとまりで学習指導を行うことを基本とすることに鑑み、単元としての授業(単発のコラム教材等ではなく)を構想することを基本としていただくようお願いいたします。

(2) 当日の授業

授業の本数、学年、単元などは、学校の校内研究計画等に基づいて決めてください。なお、決まりましたら水戸部宛メール等でお知らせいただければ幸いです。

(3) 授業者、学校の先生方及び研究代表者(水戸部)等による事後の協議

学校研究の推進に向けて、学校全体(当該学年の先生方だけの学年研等ではなく)での研究協議を行うことを基本としていただければ幸いです。密を避けるための配慮が必要な場合はその限りではございません。いずれの場合も、水戸部によるコメントの時間を適宜設定していただければと存じます。

その他、具体的な進め方は学校にお任せいたします。(例えば当日以降に実施する授業研の授業構想の検討の時間を入れることなども考えられます。)なお、密になることを避けつつ、近隣の学校の参加者も募るなど、研修の成果を広げる工夫をしていただいても構いません。

3 その他

(1) 訪問日程について

訪問日の全体の日程が決まりましたら、お手数ですがメールにてお知らせください。

(2) Zoomを利用した研究推進について

2(1)に記載の通り、遠隔で双方向の協議を可能にするZoom利用研修も実施可能です。パソコン等、通信機器と接続環境があれば特に準備の必要なく実施することができます。なお、セキュリティーの確保については万全を期しておりますが、実施に当たってパスワードのやり取り等、別途ご相談いたします。

実施方法としては、下記のようなことが考えられます。

(実施例)

- ・授業者、研究部の先生方と、水戸部による事

前の指導案検討

- ・事前授業の映像を基にした授業細案の検討
- ・事後の協議会において蜜を避けるための、分散会場(各学年の教室等)を結んだ事後研(協議会)の実施
- ・近隣もしくは離島等、遠隔地の、参加を希望する学校と本校とを結んだ、事後研(協議会)、研修会等の実施

〈補足〉

〈新型コロナウイルス感染拡大防止に係る研究推進上の配慮事項〉

1. 研究推進の取組

新型コロナウイルス感染拡大防止に係り、休校期間の延長等のため、通常の研究推進が難しい状況も考えられます。研究のための研究ではなく、日常的な国語の学習の質保証のための取組を一層重視して進めることといたします。具体的には、

- 学習指導案等の資料準備の簡略化
- 日常の授業に生かしやすいコンパクトな単元構想
- 水戸部と授業者等との常時相談体制による授業構想等の準備負担軽減等、学校の状況に応じて弾力的かつ柔軟に進められるようにします。

2. 訪問に当たって

水戸部及び学校間の情報交換を密にして、柔軟な対応を取れるようにいたします。具体的には、

- 新型コロナウイルス感染が急拡大した場合は、訪問直前でも連絡を取り合って、訪問を取りやめるなどの対応を取る。
- 感染が大きく拡大している状況があらかじめ分かっている場合は、訪問は行わず、授業をビデオ録画し、その録画を基にZoom等で研究協議を行う等の工夫をする。等々の対応策も考えられます。

3. その他

その他、必要なことがあれば随時連絡を取り合い、安全かつ有益な研究推進となるよう努めます。

6. これまでの調査を通して見られた授業改善の特徴

2018年度の研究においては、各研究指定校に共通に見られる取組として、次のような点を挙げたところである。(注7)

今年度の調査において、授業改善の特徴として各研究指定校に共通して見られたこととして、次のような点を挙げることができる。

- ・単元のまとまりを明確にした授業構想
- ・付けたい力に合った言語活動の位置付け
- ・子供たちが単元の見通しをもてるようにするための具体的な手立ての立案と実施

これらはいずれも国語科の授業構想の中核となるものである。例えば白保小学校の「授業の成果」に挙げたような単元の計画表は、子供たちが単元全体の見通しを明確にもって学習できるようにするための具体的な手立てであると同時に、単元のまとまりの中で育成すべき国語の資質・能力を明確にした授業構想がなされていることを裏付けるものでもある。また、単元全体の見通しを立てる場面は単元の導入場面にとどまらず、大道小学校の「授業の成果」に挙げた、単元のゴールとなる言語活動に結び付く本時の学習のめあてを設定したり、上田小学校の「授業の成果」に挙げた子供たちへの声掛けの一つ一つを工夫したりするなど、単元全体できめの細かな手立てが構築されていることが分かる。こうした手立てによって、嘉手納小学校や西城小学校、屋良小学校の「授業の成果」に挙げたように、単元の見通しを明確にして学んでいる子供の姿が多くみられたのも共通する特徴である。

言語活動の精度の高さも特徴として挙げられる。名護小学校の「言語活動とその特徴」にあるように、指導のねらいに確実に迫ることのできる言語活動を設定することで、「授業の成果」に挙げたような子供たちの確実な伸びを引き出すことができていた。

これらの授業改善の状況は、2018年度の研究指定校にのみ見られるものではなく、2019年度

の研究指定校の授業構想についても同様の点に配慮した授業実践が見られた。

これに加えて2019年度以降は、本時における児童の交流の活動の質が高まってきたことも特徴として挙げられる。

2020年1月に行われた嘉手納小学校での第5学年の実践『伝え合おう！まんがのひみつ 再発見！』の実践では、子供たちが常に目的を十分意識して学習を進められるように緻密に配慮された実践が行われた。指導のねらいに掲げられている、「自分の選んだ漫画の方法やその効果についての解説文を書く」という目的をしっかりと意識して、どの文章や資料を何のために読み、どのように活用するのをはっきりさせた学習が展開された。特に児童のグループ協議においては、漫画から見付けた表現技法と教科書の叙述を結び付けて、互いの考えを明らかにしていく学習が展開されていた。教師が教えることに終始するのではなく、子供たちが自ら学ぶ姿が縦横無尽に展開され、参観者の方々からも、授業改善が大きく進展しているとの評価の言葉が聞かれた。これまでの継続的な取組が大きな成果として現れたものと考えられる。(注8)

7. 2020年度調査における沖縄県の小学校国語科の授業改善の推進状況

以下、2020年度の取組について、研究指定校2校の実践を取り上げて検討する。(注9)

(1) 糸満市立真壁小学校の取組 (注10)

①授業の概要

第6学年、書くこと

単元名：『ようこそ 糸満市へ』～私たちの糸満市のよさをアピールしよう～

主な指導目標

- 利用する情報を引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。(B書くことエ)
- 伝えたい内容とキャッチコピーやその他の文章とうまく合っているかなどに着目しながら、互いの文章に対する感想や意見を伝え合うことで、自分の文章に向き合い、自

分の文章のよいところを見つけることができる。(B書くことカ)

②言語活動の検討とその過程

授業構想に当たっては、真壁小学校と筆者とがメール及び Zoom により共通理解を図りながら検討を進めた。特に、本単元の言語活動について、次のように重点的に検討を行った。

教科書教材では「防災ポスターを作る」という内容が取り上げられていたが、構想の当初の段階(授業実施日の1か月半前)から、「糸満市のよさをアピールする」という内容として設定されていた。これは指導のねらいに即して、児童がより明確な目的や課題意識をもって学習に向かえるようにしたいとの授業者の意図からであった。こうした、児童の実態を十分踏まえた単元構想が日常的に行われてきたことがうかがえる。

これを踏まえて、「ポスターを作る」ことを通してどのような資質・能力が育めるのか、また本単元で取り上げる「ポスター」どのような特徴を有していれば指導のねらいを十分に実現できるのかを精査していった。

当初の段階では、本単元で取り上げるポスターの特徴を、以下のように押さえた。

○テーマに沿って情報を取捨選択すること、そしてそれらに関係づけながら割り付けを考えること、更に限られた時数の中で文章を書くことなど、複数の言語技能を磨き、高めるのに適した言語活動。

これをさらに精緻に捉え直し、構想の第二段階(授業実施の半月前)では、次のように具体化していった。

○糸満市のよさを見直し、アピールするためのポスターでは、収集したいいくつかの情報を関連づけながら「糸満市の現状やおすすめポイント」とそれに対する「自分の考え」が最も伝わるように工夫する必要がある。ポスターという限られた字数の中で、文章にまとめたり割り付けを考えたりすることで、相手にわかりやすい表現、言葉、文となっているか吟味しながら、効果的に発信することができる言語活動である。

更に、こうした言語活動の特徴を明確にすることによって、本単元で目指す資質・能力をより確実に育成することとした。

○ポスターに書くという活動を設定することで、B エでねらう「自分の考えが伝わるように」「書き表し方を工夫する」力を育成するとともに、ポスター作成の段階では、自分の考えにぴったり合う情報(グラフ・図表など)を用いて、自分の考えとの関係を明確にするなどの力を育成したい。また、B カでねらう「文章全体の構成」「展開が明確になっているか」などについて、友達と具体的に意見を述べ合うことで、それらを自分の表現に生かそうとする意欲喚起と学びの良さを実感することができる。

③単元及び本時の指導計画

こうした、指導目標とその目標を実現するのにふさわしい言語活動の吟味を通して、単元の指導過程について具体化していった。その概略は次の通りである。

単元の指導計画の概要(全7時間扱い)

第1時

- ・自分たちのイメージしている糸満市についてのアンケート結果から、実態を理解する。
- ・アンケート結果をもとに、糸満市のよさについて、文章のみで表現されたものとポスターで表現されたものとを比較し、ポスターのよさを確かめる。
- ・調べてどうしても伝えたいと思った事実や考えをポスターで表現したいという意欲を持つ。

第2時

- ・どんなポスターにしたいのかイメージを持ち、学習の見通しを立てる。(資料収集や整理、割り付けの方法などについて確認)
- ・資料を集めて整理する。
- ・割り付けのポイントを確認する。

第3～6時

- 3時…資料を基に何をポスターで伝えたいのか、自分の考えを明確に持つ。
- 4時…ポスターに利用する資料やそれに添える文章を考える。
- 5時…ポスターの紙面全体を見通して、自分の

考えが伝わるよう書き表し方を工夫する。
6時…ポスターにまとめて書き表す。

- ・150～200文字の原稿用紙を活用。
- ・中間交流会を持ち、自分のポスター作りに生かす。

第7時

- ・ポスターを読み合い、表現の効果が現れている部分について互いに認め合う。
- ・お互いのポスターを読んで学んだことなどをまとめたり、この学習を生活に生かせる場について話し合ったりする。

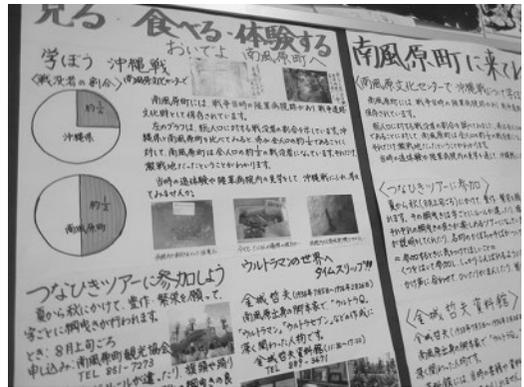


写真1：教師自作のポスターのモデル

このうち、本時は次の表1の通り構想した。

④授業改善とその成果

本単元の授業構想及び実践の成果として、以下のことが挙げられる。

ア. 指導のねらいを実現するための質の高い言語活動の位置付け

言語活動を通して指導事項を指導するという基本的な枠組みをもっている国語科においては、言語活動の質が学習指導の質を左右することとなる。本単元の構想においては、その質を高めるようとする授業の工夫改善の経過が明確に見て取れた。

すなわち、単にポスターを書くという活動だけが目的化してしまわないように、指導のねらいに基づき、どのような特徴をもつポスターを言語活動として設定するのかを精緻に検討することが大切にされていたのである。

本単元の授業構想においては、前掲の単元の指導目標を実現することができるよう、最終的には学習指導案に次のようにポスターの特徴が押さえられていた。

3 言語活動とその特徴

(1) どのような言語活動か

伝えたいことをポスターに書きまとめ、互いのよさを交流すること。

(2) どのような特徴をもつ言語活動か

本単元で取り上げるポスターは、自分たちが暮らす糸満市の魅力を、市内公共施設に掲示することで、市外から来た多くの方々にアピールするものである。その内容としては、①自分が

考える一番の魅力を表すキャッチコピー、②魅力を客観的に伝える写真や図表、そして、③それに添える魅力を解説する文章で構成することとする。糸満市の魅力をこのポスターにまとめていくためには、収集したいくつかの情報を関連付けながら「糸満市の現状やおすすめポイント」とそれに対する「自分の考え」が最も伝わるように工夫する必要がある。ポスターという限られた文字数の中で、文章にまとめたり割り付けを考えたりすることで、相手にわかりやすい表現、言葉、文となっているか吟味しながら、効果的に発信することができる言語活動である。

またこうした精緻な分析の結果、具体的な教師自作のポスターのモデルとして、児童に提示していた。(写真1) こうした的確な分析や具体化の手立てがない場合、「ポスターを作る」際、絵を描くことに時間を要したり、ほとんど文章がない形式になったりする実践も散見される。その結果、「活動だけで力が付かなかった」、あるいは「やはりポスターなどではなく作文をしっかりと書かせなくては」といった意識が指導者に見られる場合もある。安易に活動なしの、教師が教え込むあるいは無目的に書かせたり読ませたりする学習指導に戻るのではなく、本単元の実践に見られるように指導目標に正対した言語活動の丁寧な開発を着実に進めていることが、沖縄県の小学校国語科授業改善の大きな推進要因となっていると考えられる。

表1 本時の指導計画【5／7時】

1 本時のねらい

読み手の興味をひくポスターになるよう、お互いの表現の効果について交流し、よりよいポスターになるようにする。

2 本時の授業の工夫

自分の考えが最も伝わるように児童間で交流し、ポスターを再構成する活動を取り入れる。

3 指導過程

時間	学習活動	指導上の留意点 (指導の手立て, 児童の反応 等)	◎評価規準 ◇評価方法 ☆個 (つまずき) への支援
導入 3分	1. 前時の学習の振り返りから、本時の学習の見通しを持つ。 2. 本時のめあてを確認する。	※前時の振り返りで、個々の課題について書き出させておく。	☆〔個への支援〕 事前に課題について教師と焦点化しておく。
(めあて) より魅力をアピールするポスターにするために、書き表し方について交流しよう。			
展開 35分	3. 交流の仕方を確認し、交流する。	〈交流の進め方〉 ① 個々の課題 (アドバイスがほしい部分) を共有する。 ② 友達のポスターを読んで、効果的な表現ができている部分や課題と感じている部分について、よりよい表現を考える。 ③ アドバイスし合う。	☆〔個への支援〕 友達のポスターの良さを相手に伝えたり、自分の文章に生かせる表現を見つけたりすることを中心に交流させる。 ◎伝えたい内容とキャッチコピーやその他の文章とうまく合っているかなどに着目しながら、互いの文章に対する感想や意見を伝え合うことで、自分の文章に向き合い、自分の文章のよいところを見つけている。(活動の様子・ポスター) [B書くこと カ]
		【交流の視点】 ・文章やキャッチコピー、見出し、図表など、加筆・修正したい部分を伝え合い、よりよいポスターになるよう助言し合う。 ・友達のポスターの効果的な表現に気づき、伝えたり自分のポスターに生かしたりすることができないか考える。	
	4. ポスターの手直しをする。	・友達からもらったアドバイスをもとに、加筆・修正した場合、自分の一番伝えたいことがより伝わるのか検討・吟味しながら手直しをする。	☆どこをどのように直したらいいのか、付箋紙を使って加筆・修正について、一緒に行く。
7分	5. 振り返りをし、グループ内で発表する。 6. 次時の学習を確認する。	・交流して学んだこと (友達にアドバイスをしたり、アドバイスされたりして感じたことなども含める) や、次の学習で取り組んでみたいことなどを書くよう視点を与える。	

イ、一人一人の課題意識を重視した指導の手立ての具体化

本単元では、いかに子供一人一人の課題意識を喚起するかという点を大事にして単元構想が進められていた。

前項のように、ポスターには「糸満市の魅力を解説する文章」を書くこととなる。こうした題材の場合、観光ガイドブックなどの情報を引き写しただけになる状況も見られる。しかし本単元では、糸満市に住む子供たちだからこそ見出せる魅力を解説できるようにしていた。

例えばある児童は、糸満市特産の人参「美(ちゅ)らキャロット」を取り上げて、ニンジンシリシリにして食べると非常に甘いことなど、実体験を元にその魅力を解説したり、通常の人参に比べて糖度が倍以上あることをグラフを用いて客観的に記述したりすることができた。

更に本時では、お互いが記述している文章を読み合い、共有することをねらいとした。その際、交流の視点として、

- ・文章やキャッチコピー、見出し、図表など、加筆・修正したい部分を伝え合い、よりよいポスターになるよう助言し合う。
- ・友達のポスターの効果的な表現に気づき、伝えたり自分のポスターに生かしたりすることができないか考える。

といった点を具体的に示していた。そのため、単に事前にしたものを読み上げるような交流ではなく、互いが表現したいことを分かち合い、どのようなよさがあるのかを確かめたり、よりよいものにするための協議を行ったりすることができた。

(2) 金武町立金武小学校の取組 (注11)

①授業の概要

第3学年、読むこと

単元名：『心がジーンとしたおすすめの本をしょうかいしよう』

主な指導目標

- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。(C読むことエ)

- 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。(C読むことオ)

②授業構想の経過

金武小学校の実践については、2か月前から単元構想が本格的に始まった。メール及びZoomを活用しながら、授業構想を詳細に詰めていった。

構想を進める中で、順次検討課題について検討を進めていった。主な内容は以下の通りである。

- 単元で指導する主な指導事項と言語活動の方向性
- 指導のねらいに照らして、並行読書材をどのような選書基準で選定するか
- 指導事項をCエ、言語活動をリーフレット型ツールにした場合、どのようなパーツ構造が望ましいのか
- 教科書教材「わすれられないおくりもの」と自分が選んだ作品をどのように組み合わせる単元の学習過程を進めていけばよいのか
- 単元のゴールとなる第3次をどのように展開していったらよいのか

このうち、並行読書材については、指導のねらいと児童の実態を踏まえ、必ずしも同一作者の作品だけではなく、子供たちが心を揺り動かされそうな作品を幅広く選書することとした。

また、「C読むことエ」を主な指導目標とすることから、気持ちの変化を具体的に想像して読むことを、リーフレット型ツールでどのように表現すればよいかについては、時間をかけて入念に検討した。その結果、当初は気持ちの変化を書き出す形で構想したが、子供たちが学ぶ必然性をもてるようにすることを重視し、「ジーンとしたところ」とそのわけを中心に表現できる形式をとることとした。最終的な学習指導案には、次のように記載されている。

3 本単元における言語活動

本単元では、物語を読んでジーンとくるところや中心人物の気持ちの変化をリーフレットにまとめ、自分が選んだ物語のよさを学級内で説明し合う言語活動を位置づけた。

物語の大体を捉えるために「あらすじ」をまとめて、「ジーンとしたところ」を書く。そして「ジーンとした理由」を、本を用いて友達に伝えながら明確にして文章にまとめる。最後には、自分の体験や他の物語、初発の感想と比べて「感想」をまとめる。そうした活動により、本単元でねらう「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像する」力を身につけて「文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつ」ことができると考え、本言語活動を設定した。

③単元及び本時の指導計画

単元の指導計画の概略は以下の通りである。
(単元の指導過程の評価規準は省略。)

表2 単元の指導計画 (10時間)

次	ねらい・学習活動	
一	①ジーンとする作品のよさに気づき、学習への意欲を高める。 ・教師作成のモデルを通して、単元の【めあて】と【ゴール】をつかみ、学習の見通しをもつ。	
二	②「わすれられないおくりもの」のあらすじをまとめる。	③自分で選んだ本のあらすじをまとめる。
	④ジーンとしたところを書く。	⑤ジーンとしたところを書く。
	⑥「ジーンとしたところのわけ」をはっきりさせて、リーフレットの「ジーンとした理由」を書く。	⑦「ジーンとしたところのわけ」をはっきりさせて、リーフレットの「ジーンとした理由」を書く。
	⑧感想を書く。 ・体験や他の作品、初発の感想のどれかと比較しながら感想を書く。	⑨感想を書く。 ・体験や他の作品、初発の感想のどれかと比較しながら感想を書く。
三	⑩完成したリーフレットを用い、本を開きながらジーンとしたところやそのわけを説明し合うとともに、友だちが説明した本を読んでみる。	

本時の学習指導案は、表3の通りである。

④授業改善とその成果

本単元の授業構想及び実践の成果として、以下のことが挙げられる。

ア. 並行読書材の的確な選定

本単元の指導のねらいに即して、子供たちが自ら本を手にとれるように十分配慮して、多く



写真2：並行読書マトリックスを活用して交流する

の本が準備されていた。

こうした手立てを取ることで、子供たちが単元で読む読書の絶対量は飛躍的に多くなる。日常的に本を読む習慣のない児童に読む能力を育む上でも大切な手立てであると言える。また、誰がどの作品を読んだのかが一目でわかる一覧表(写真2)、いわゆる並行読書マトリックスなどを活用することで、子供たちが交流相手を自ら見つけて交流するなど、決め細かな手立てが講じられていた。

読解力の低下や読書離れが指摘されて久しいが、こうした的確な手立てを日常的に講じていることが、授業改善を推進し、学力の底上げにも結び付いていると考えられる。

イ. 指導のねらいを実現する質の高い言語活動の開発

本単元では、「C読むこと」の指導事項エの中でも「登場人物の気持ちの変化」を場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することをねらっている。授業構想段階で、そのねらいを子供が自覚し、目的や必要性を実感しながら学んでいくことができるものにするために、リーフレットの形式をできるだけシンプルなものに絞り込んでいった。それはまさに付けたい力を具体化し、明確化する過程でもあった。

このねらいの場合、「登場人物の気持ちの変化をまとめよう」といった指示に陥ってしまうことがしばしば見られる。しかし、物語の主人公の心情は、絶えず揺れ動いて描かれるため、

表3 本時の指導【7/10時間】

(1) 本時の目標（本時のねらい）

○選択した作品のジーンとしたところについて、そのわけを他の場面と結び付けてはっきりさせ、「ジーンとした理由」を書きまとめることができる。

(2) 本時の評価

ジーンとした理由を、複数の場面の叙述を結び付けて文章にまとめている。

(3) 展開

	学習内容・活動	教師の手立て	評価規準 (評価方法)
導入 3分	1. 前時までの学習を想起し、本時のめあてを確認する。	・これまでの学習をふり返ることで、単元全体における本時の学習の位置づけについて気づかせる。	★生徒指導の重点 自己存在感 ・一人ひとりの「ジーン」の理由は違っていてもよいことを確認し、自己存在感を実感させる。
	【めあて】ジーンとした理由をリーフレットの「ジーンとした理由」に書きまとめよう。		
展開 35分	2. 前時のジーンとしたところを各自確かめる。(1分) 3. 前時に学習を想起し、「ジーンとしたわけ」をどのように見つけるのか、またそれをどのような言葉で説明すればうまく説明できたかを確かめる。(5分) 4. 各自で「ジーンとした理由」を探す。(4分) 5. 「ジーンとした理由」をリーフレットに書きまとめるために、友達と交流してよりはっきりと考えをもてるようにする。(15分) 6. 交流を通してはっきりさせた「ジーンとした理由」をリーフレットに下書きする。(10分)	・前時（第6時）に使用した全文揭示に記載した矢印を活用して、前後の場面の叙述と結び付けて「ジーンとしたわけ」を見つけたことを確認する。 C児への手立てで…うまく見つけられない子には、ページをめくって他の場面から見つけられるように促すとともに、その後の交流場面で友達と相談して見つけてもよいことを伝えておく。 ・「リーフレットにジーンとした理由を駆けるようにするため」交流するという、交流の目的を確認する。 ・並行読書マトリックス表を活用しながら、交流相手を見つけて交流する。 ・時間は10分確保するが、交流して理由を説明することができると自信を持った子は、その時点で書きまとめる学習に入ってよいことを指示する。	ジーンとした理由を文章にまとめている。(リーフレット)
終末 7分	7. 学習をふり返る。 ・ジーンとしたところをまとめてみて気づいたことをノートに書く。	・ジーンとしたところをまとめてみて気づいたことを記述させ、読みの深まりを実感させる。	

すっきりまとめられないケースが多くなる。また、何のためにまとめるのかを実感できない児童も出てくる状況が散見されている。

本実践においては、児童が大好きな本のジーンとするとところを紹介するという言語活動と密接に結び付け、「ジーンとするとところ」と「そのわけ」をリーフレットで説明することとした。その際、「わけ」については、前後の他の場面から導き出すことによって、「場面の移り変わりと結び付けて」読むという指導のねらいを確実に実現できるようにしている。

授業者は繰り返しリーフレットを試作する中で、子供たちの思考に即した言語活動を精緻に開発していった。

8. 考察

(1) 2020年度の状況から

前項に取り上げた2校の取組は、いずれも教材を教えることにとどまらず、児童の実態や指導のねらいに基づいて単元を構想する、いわば手作りの授業構想が精度高く進められていたと言える。

学校や学年、領域の違いはあっても次のようなことが共通に見られた。

- 指導事項を基に単元で育成を目指す資質・能力を明確にしていること。
- 目指す資質・能力を付けるための、児童にとって魅力的で課題意識を明確に喚起できる言語活動を設定していること。
- その言語活動を通して、目指す資質・能力を確実に育成できるよう、言語活動を精緻化していること。
- 言語活動の精緻化を図るために、教師自身がモデルを作成するなど、言語活動の細部の特徴などを具体化して、効果を確かめていること。
- 単元の指導計画において、児童の課題意識が一貫して強まっていくように、各単位時間とゴールとなる言語活動とが、あるいは単位時間相互がそれぞれ明確に結び付くものとなるように工夫されていること。
- 本時の学習及び学習の目当てが、設定した言

語活動に向かっていくものとなることで、本時の学びの意義や目的が自覚しやすくなるよう工夫されていること。

(2) 4年間を通じた取組から

前項のような取組は、2017年度から行われてきたが、近年はそれが一層充実したものとなっている。授業づくりにおいては、児童の実態を的確に踏まえて付けたい力を付けるべく手立てを工夫したり、それが有効であったかどうかを判断したりすることを繰り返していくことが重要になる。「マイノート」による日常的な教材研究(注12)をはじめとした、近年の沖縄県の小学校国語科の授業改善は、そうした最も重要な基盤をしっかり踏まえた、地に足の着いた授業改革であると言えるだろう。

さらにそれを県下全域で推進する上で、県教育委員会を中心に授業像の的確な共有化を進めておられることが、各学校の、そして教師一人一人の努力を確実に実らせていると考えられる。

注

(注1) 水戸部修治「沖縄県における小学校国語科の授業改善要因の解明に関する基礎的考察」京都女子大学『発達教育学部紀要第14号(1)』, 2018

(注2) 平成29年度研究経費助成「沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明」研究報告書

平成30年度研究経費助成「アクションリサーチによる沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明」研究報告書

平成31年度(令和元年度)研究経費助成「沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明と更なる推進に向けたアクションリサーチ」研究報告書

(注3) 沖縄県教育庁義務教育課「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果〔概要〕」, 2015

(注4) 国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査 調査結果資料」, 2015~2019

(注5) (注1)に同じ。

(注6) 2020年6月及び9月に、2020年度の研究指定校に対して文書を作成し共通理解を図った。

(注7) 平成30年度研究経費助成「アクションリサーチによる沖縄県における小学校国語科の授業改善の推進要因の解明」研究報告書より抜粋

(注8) 平成31年度(令和元年度)研究経費助成「沖縄県における小学校国語科の授業改善の

推進要因解明と更なる推進に向けたアクションリサーチ」研究報告書より抜粋

- (注9) 2020年度は、金武町立金武小学校、うるま市立高江洲小学校、浦添市立沢岬小学校、糸満市立真壁小学校、石垣市立石垣小学校の各校に御協力をいただいた。紙幅の都合により本稿に掲載できなかったが、高江洲小学校、沢岬小学校、石垣小学校でも極めて充実した授業を実施いただいている。
- (注10) 学習指導案の作成は、糸満市立真壁小学校（授業者：金城由利佳氏）による。
- (注11) 学習指導案の作成は、金武町立金武小学校（授業者：與那城幸乃氏）による。また、金武町立金武小学校の研究においては、沖縄県授業改善アドバイザーの東盛麻里氏にも大

きなお力添えをいただいた。

- (注12) 沖縄県全域で実施されている教材研究。
(注1) に詳述。

謝辞／付記

本論は、京都女子大学研究経費助成（平成29年度～令和2年度）による研究成果の一部をまとめたものである。また研究の実施に当たっては、延べ26校の研究指定校（調査訪問校）、県教育庁義務教育課、各教育事務所、市町教育委員会の皆様に多大なるご協力をいただいている。ここに改めて感謝申し上げたい。